一般口演

10.　食事前尿糖検査による糖尿病の血糖値コントロールについて

中村 信也

まほろば東京クリニック

【研究目的】

朝食前と夕食前に尿糖を測定し、その結果で普通食にするか制限食にするかを決定し食事する。薬物療法なしで糖尿病をコントロールすることを狙いとする。

【方法】

自分の進行性の糖尿病を、食前尿糖検査で食事療法を実施し、薬物治療なしにほぼ正常化するに至った。

【考察】

現在の糖尿病治療は薬物治療がありきで、薬物量の調整として血糖値を測定している。筆者は随時尿糖（３＋）、随時血糖値３３８ｍｇ/dl、ＨｂＡ１ｃ８．０の結果に愕然し、積極的に食事療法で薬物なしでほぼ正常化することに挑戦し、成功した。現代医療は薬量調整に重点をおき、なるべく薬物に頼らない、という発想に欠けている。膵臓機能活性化という自然療法としての観点から考察してみた。

一般口演

11.　特発性腸間膜静脈硬化症の46例の検討

佐藤 順一朗[1) 2)]・長瀬 眞彦[2)]

1）医療法人社団WHM クリニックプラス池尻大橋　　2）吉祥寺中医クリニック

【目的】

特発性腸間膜硬化症(IMP)はまれな疾患であり、近年その発症メカニズムや診断などに関しての報告、症例報告のmeta analysisなどがでてきているものの、詳細はあまりわかっていない。今回、ここ３年間になされた報告を検討し、今後必要と思われる研究の方向性についてもあわせて検討した。

【方法】

2022年1月1日から2024年6月20日の期間内にpubmedで確認できた12報の計46例について、症例の情報を抽出し検討した。

【結果】

報告はほぼすべて東アジアからのものであり、特に中国からのものが多かった。性別は女性が25例とやや多く、平均年齢は64.4歳、主訴の大半は腹痛であり、半数に漢方薬の服用歴があり、95%が腹部骨盤CT、43%が下部消化管内視鏡検査を用いて診断されていた。全例で休薬と経過観察がなされ、6例が手術を要し、死亡したのは3例であった。

【考察】

中国、台湾、日本からの報告が大半である傾向に変化はなかった。山梔子含有の漢方薬がIMPにつながる知識や仮説、診断方法は浸透し症例報告に反映されていた。一方で、使用方剤の詳細への言及はほぼなかった。また多くの報告で内服期間への言及はあったものの、山梔子の累積内服総量への言及は１件のみだった。山梔子含有方剤には主要症候のキードラッグも多く、実臨床の運用上の有益性を考えると、方剤ベースの報告や累積内服総量に着目した研究が望まれる。また、ICD11に証に基づく分類が採用されたこともあり、中医学的弁証を用いた症例解析が進むことが今後期待される。

一般口演

12.　東洋医学系活動の回顧と省察
―いかにして後継者を見出し育てるか―

一原 愛心

鹿児島大学医学部医学科

【背景】
　東洋医学系団体における部員数の減少や活動の縮小は喫緊の課題であり、この問題に手を打たなければ、近い将来、東洋医学を学ぶ場が失われ、東洋医学に興味を持つ人がさらに漸減していく可能性がある。
【目的】
　東洋医学に係る先代の英知や経験および、学習の場をまもるべく、後継者を見出し育てる術を考察する。
【方法】
　演者が東洋医学に興味をもったきっかけや、これまでの活動を回顧、省察して、新たに東洋医学に興味をもつ人を増やし、学生の学習意欲を向上させるためのヒントを得る。
【考察】
　東洋医学に興味を持った理由としてよく耳にするのは、①イベントの参加や、②漢方薬に詳しい知人の存在、③漢方薬が著効した経験、の3つである。この3点を意識することは、東洋医学を広めていく上で効果的であり、特に、イベントの開催については、参加を促す動機付けが必要となり、企画アイデアを出す学生の力量が試されることとなる。
　しかし、イベントに1度参加するだけではインパクトが薄いため、イベント後のフォローアップと定期的なイベントの開催をすることで、東洋医学系団体の活動にコンスタントに参加する環境を整えることが必要になってくる。
　イベント後のフォローアップでは、ラポールを形成するために、丁寧なコミュニケーションを通して、学生一人ひとりの興味や価値観、学習意欲を把握する。そして、それぞれの学生のキャラクターを踏まえて、次の勉強会やイベントの案内をしていく。イベントの開催は、マンパワーが少ない団体ほど困難であるが、他団体と連携・協力することで可能となる。複数の団体が連携してイベントを行えば、各団体にかかる負担が減ることに加えて、廃部の危機も乗り越えやすくなる。
【結語】
　個人個人に対する丁寧なアプローチと、多団体とのコラボレーションは、東洋医学に興味を持たせ、活動を継承していくために有用な方法であるといえる。

一般口演

13.　「順天堂大学東医研」のこれまでとこれから
創立5周年の節目を迎えるにあたり

石井 菜々子[1)]・福田 幸純[1)]・津村 佳生[1)]・友岡 清秀[2)]・谷川 武[2)]

1）順天堂大学医学部　　2）順天堂大学衛生学・公衆衛生学講座

我々が所属している「学生のための順天堂大学東洋医学研究会」は、「医療の洋の東西を問わない」というモットーの元、東洋医学に興味をもった学生が主体となり2018年12月に順天堂大学で初の東洋医学を学ぶ団体として設立された。現在部員数は90名を超え、医学部以外の学生も多く在籍し多方面からの東洋医学の学びの場として機能している。

本研究会では、主な活動として月に1度の漢方と鍼灸に関する定期勉強会に加えて、週に１度中医学の基礎理論を学ぶセミナーを開催している。定期勉強会は部の設立初期から現在まで継続しており、開催してきた講義は60回を超える。また、年に1度学生のみならず一般の方も参加可能である特別公開シンポジウムを開催している。

学内だけでなく学外活動も積極的に行っている。日本東洋医学会学術総会や日本東方医学会学術大会、日本アーユルヴェーダ学会研究総会などの学会に参加し、発表を行っている。更に、昨年インドに赴き、ヨガやアーユルヴェーダなどの伝統医療に関する海外研修も行った。他にも学生間で漢方に関連するイベントを共有したり、イベントの企画を行ったりしている。

今年で本研究会は創立５周年を迎えた。この節目となる年に、改めて我々学生がどのように東洋医学に触れ、学び、染まっていったのかをお話しする。加え、これまで行ってきた活動の振り返りを踏まえて、今後の展望を紹介する。